

平成28年度 第1回帯広市総合教育会議

1. 平成28年11月22日火曜日 10時30分～12時
総合教育会議を帯広市役所4階 会議室に召集する。

2. 本日の出席者

帯広市長	米	沢	則	寿
教育長	嶋	崎	隆	則
教育委員	田	中	厚	一
教育委員	伊	藤	成	昭
教育委員	藤	澤	郁	美
教育委員	佐々木	し	ゆり	

3. 本日の議事日程

(1) 経過報告等

(2) 協議事項

学校教育と社会教育の連携について

事務局

定刻となりましたので、ただ今から平成28年度第1回帯広市総合教育会議を開催いたします。開会にあたりまして米沢市長からご挨拶を申し上げます。

米沢市長

本日は、大変お忙しい中、本会議にご出席いただき誠にありがとうございます。また、皆様におかれましては、日頃から教育はもとより、本市のまちづくりにご尽力を賜り、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。さて、少子高齢化やグローバル化、急速な情報化、技術革新の進展など、社会・経済を取り巻く環境が大変大きく変化する中、持続的で活力のある地域発展に向け、自立した個人として主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する力を備えた人材が求められております。こうした人材を育成していくためには、子どもたちが社会との関わりの中で豊かに学ぶことを通し、自らの人生、社会をよりよく変えられるという実感を持つことが重要であり、現在、国において、社会とのつながりを重視した新しい学習指導要領の検討が進められているところであります。帯広市におきましては、教育基本計画に基づき、環境教育やふるさと教育などの分野で学校と社会教育施設等が連携した教育活動を積極的に進めてまいりました。今後とも学校と施設等の間で目的意識や情報の共有などを図りながら、これまで以上に深化させていく必要があると考えております。本日は、今年度の経過報告等の後、学校教育と社会教育の連携に関わる取組み事例を共有し、今後に向けた意見交換を行いたいと考えております。委員の皆様には、忌憚のないご意見をいただきますようお願いをいたしまして、私の挨拶といたします。本日はどうぞよろしく願いいたします。

嶋崎教育長

それでは、私からも帯広市総合教育会議の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。本日の総合教育会議につきましては、新しい教育委員会制度が完全移行になって初めての会議となります。私といたしましても、身の引き締まる思いであります。さて、ご案内のとおり、本市の教育に関する動きとしましては、新総合体育館の整備運営、小中学校の適正規模確保に向けた取組みのほか、目前に迫ってまいりました冬期アジア大会の開催など目白押しとなっております。また、本年で5回目の開催となりましたフードバレーとまちマラソンにつきましては、年を重ねるごとに参加者も順調に増加しており、十勝・帯広はもとより、道内でも定着が図られてきたものと実感しているところでございます。その一方で様々な課題も教育にはございます。こうした中、本日の協議事項であります、学校

教育と社会教育の連携につきましては、先ほど市長からもお話がございましたが、教育委員会内部でも、これまで以上に学校教育部と生涯学習部が緊密に連携した活動を進めているつもりでございますし、加えて、学社連携に関しましては、教育委員会のみならず、特に社会教育分野におきましては、市長部局とも大きく関わってございますし、また、民間の活動とも融合しながら、推進する分野とも思っております。このようなことから、子どもたちの健やかな成長や生涯にわたって自己実現への学びに欠くことのできない学社連携に関しまして、様々な観点から意見交換をさせていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

事務局
米沢市長

以後の進行は米沢市長にお願いします。

それでは、次第にしたがいまして進めさせていただきます。2. 経過報告等に入ります。事務局から説明願います

事務局

私からは資料1、4、5についてご説明させていただきます。まず、資料1をご覧ください。今年度の教育関連の取組み経過と今後の予定についてご説明させていただきます。4月でございますが、学校・家庭・地域の連携の取組みを支援する、こども学校応援地域基金を創設いたしました。10月中旬までで8件、約107万円のご寄附があったほか、市の積み立てを活用し、小学校のこども祭りなど4件、20万円を助成したところであります。5月には、新総合体育館整備運営事業について、PFI法に基づく特定事業として募集要項を公表いたしました。その後、応募者との個別対話等を経て、9月30日に書類提出を締め切っております。6月には、小中学校の児童生徒と保護者を対象に、学校生活や学校教育全般に関する意識調査結果をとりまとめました。学校の授業に望むことや1学年当たりの学級数などのご意見を伺い、今後の各種計画づくりなどの基礎資料としていくものであります。9月には、小中学校の適正規模・適正配置に関する市民検討委員会報告書及び帯広市まち・ひと・しごと創生総合戦略の進捗状況に関する評価をとりまとめております。評価の内容につきましては、この後、詳しくご説明いたします。10月には、第63回日本PTA北海道ブロック研究大会が20年ぶりに帯広市で開催されました。初日が7分科会での研究討議、2日目が基調講演を中心とした全体会で、全道から延べ1,500名あまりが参加されたと伺っております。今月でございますが、毎年度実施しております、教育に関する点検・評価報告書を取りまとめております。内容は、この後、詳しくご説明いたします。また、

先ほどの市民検討委員会報告書を受け、(仮称)小中学校適正規模の確保等に関する基本方針(素案)をとりまとめたほか、(仮称)帯広市公共施設マネジメント計画(案)をとりまとめております。この基本方針では、農村部の小中学校を含めた適正な学校規模の基準を示すとともに、児童生徒、保護者、地域住民への配慮やエリア・ファミリーの充実などの配慮事項を整理しております。また、追加資料1として、公共施設マネジメント計画(案)を配付させていただいております。本計画は公共施設等の長寿命化や施設総量の適正化などに取り組むもので、社会教育施設については、施設の大規模改修や施設更新が必要と総合的に判断される場合、今後の設置・運営のあり方について検討を行うことや、さらなる民間活力導入の検討を行うことなど、また、学校教育施設については、適正配置や長寿命化の推進、大規模改修時等における福祉センターや児童福祉センターなどとの複合化の検討などを記載しております。このほか11月14日から30日まで、市内6か所で、教育委員の皆様が地域にお伺いする教育懇談会が開催中であり、ほかに、今年17日には、新総合体育館に関わり、株式会社オカモトを代表企業とするグループを優先交渉権者として決定した旨を公表したところでございます。今後の予定でございますが、来年1月には、新総合体育館整備運営事業の仮契約の締結、2月には2017年冬季アジア札幌大会の開催、3月には、小中学校適正規模の確保等に関する基本方針の策定と新総合体育館に関わる本契約の締結を予定しているところであります。次に資料4に基づきまして、総合戦略の評価について、教育関連を中心にご説明いたします。地方創生の取組みにつきましても、国の交付金などを活用し、昨年度から事業に着手する一方、今年2月に取組みの基本となる総合戦略を策定いたしました。この戦略は毎年度、評価を行うこととしており、今年9月にお手元の資料4及び資料5の評価表を公表しております。資料4の1ページをご覧ください。基本目標1、新たな『しごと』を創り出すでは、1-3、産業人の育成として、小中学校でのキャリア教育や南商業高校での実践的教育などを進めており、高い就職率などに結びついている一方、地域産業の担い手不足等に対応するため、各学校段階で効果的・実践的なキャリア教育を推進することなどが課題となっております。次に3ページ、基本目標2、十勝・帯広への『ひと』の流れをつくるでは、2-1、地域の魅力の共有として、小中学校のふるさと教育や南商業高校の全校ボランティアのほか、社会教育施設において、

ふるさとに関する学習活動などを推進しております。これにより地域に対する理解促進が図られてまいりましたが、移住希望者等に十分なアピール力を発揮するには至っていない状況でございます。最後に5ページ、基本目標3、結婚・出産・子育ての希望をかなえるでは、3-2、子育て・教育環境の充実として、学校・家庭・地域の連携や教育相談等に取り組んでおり、基金の創設に向けた検討や、ボランティアの交流の場の提供などが進みました。一方、地域を挙げて子どもを見守り、育てていくため、ボランティアのさらなる参画等を図っていくことが課題となっております。私からは、以上であります。

中野 部長

それでは、私から資料2及び資料3を用いまして、平成27年度に実施した事業を対象とする事務の管理及び執行状況の点検・評価に関する報告書についてご説明いたします。説明にあたりましては、市長及び教育委員の皆さまには、それぞれのお立場で、私どもからの説明をさせていただいておりますので、資料2の1ページの点検及び評価の基本的な考え方などにつきましての説明は割愛させていただき、本日の協議事項の学校教育と社会教育の連携に関連する部分のみご説明させていただきます。それでは、資料2の11ページをお開きください。基本目標のともに学びきずなを育む地域づくりのうち、個別目標2の1、ふるさとの理解の促進の取組みの成果の(1)として、百年記念館がエゾリスの暮らしなどを紹介する出前講座を実施し、10校12学級の児童がふるさとの自然について学びました。課題及び今後の方向性といたしまして、教材の更新や新たなプログラム作りに取り組む旨を書いております。具体的な内容としましては、12ページの枠内に、野生動物の出前講座の内容を記載しておりますので、後ほどご覧いただきたいと存じます。次に13ページ、きずなづくり・まちづくりでは、(1)まちづくりへの参画を促進する教育・学習活動の推進におきまして、取組みの成果の中段に、図書館で行う、語り手育成講習会、学校図書館クリニックなどの講座受講者が、その技術を生かして図書館や小学校などで活躍しています。今後の方向性といたしまして、社会教育施設では、知識技術の向上・継承を図りながら、活動できる人員の増員を図ります。14ページの枠内には、図書館ボランティア養成講座の内容について記載しております。点検・評価の報告書の説明は以上でございます。

米沢 市長

ただ今の取組みにつきまして、委員の皆様からご意見やご感想な

田中 委員

どをお伺いしたいと思います。

それでは、私から感想を含めて、市長に考えていただければと思う点を話しさせていただきたいと思います。資料4、1-3、産業人の育成のところにキーワードとして出てくるキャリア教育の観点について、市長の冒頭のご挨拶で、グローバルな世の中になってきて益々経済状況の問題や地域が沈滞化していくなか、これから新しい若い世代が地域に根ざして、しっかり地域をよりよい方向へ導いていくことができるかということが教育には問われているだろうというお話をされていたと思います。その中でこのキャリア教育がかなり重要になってくるだろうと思って聞いておりました。元々は職業教育という言い方をされていて、私の理解では、こういう職業はこういう勉強が必要で、もっと勉強しなさいというところから始まったことだと思います。最近の流れでは、それだけではなくて、恐らく自分のライフデザイン全体を考えること、働く意味、自分の希望や夢を達成するために、今どういうことが望ましいのか等々のより広い概念としてのキャリア教育を導き出しているのだと理解しております。私を例にとれば、夢や希望があったわけではなく、若くして何かをやりたかったということにはなかったのですが、昔と今が明らかに違うのは、私たちが子どもだったとき期待感だけは恐らくあった気がします。自分が夢や希望を持てばそれを達成できる社会だったのではないかと理解しています。今の若い人たちは、今の世の中に期待や夢を感じられない、どうせこのくらいにしかならないというイメージを持っているのではないかと思います。もっと率直に言えば、自分ひとりで何をやろうと世の中は変わらないし、何もできないということがあると思います。高度成長化のバブルの時はもっとそういったイメージが強かった気がします。これからの時代は、自分たちがよりよい社会に変えることができる、先ほど市長もおっしゃられたとおりです。小さい時から実践させていくことが必要という気がします。自分たちでこの地域を変えていくために、こういうことができる、こうやらなければいけないということ、後ほど出てくるとは思いますが、アクティブ・ラーニングやPBL（プロジェクト ベースド ラーニング）などの学習活動を使いながらやることになると思いますが、要するに若者を重用していくという社会や世界、それを若者が実感できることが大事だと思います。それができる形をどうしたら取れるのか、このキャリア教育という言葉を見て思いました。世代交代は、世代交代される側が世代交代をし

ていくことを明確に示してあげなければいけない。抽象的ですけども、若者や子どもたちを本気であてにしている、大事にしていることをもっと子どもたちにわからせる社会を作っていただきたい。そのためには何をしていくかということ。それが冒頭に言われたように、持続的で活力のある社会づくりにもつながるだろうと思いました。

伊藤 委員

私も今の報告を受けての感想を端的に述べさせていただきたいと思います。教育大綱にある「ふるさとの風土に学び、人がきらめき人がつながる、おびひろの教育」という基本理念があります。学校教育において、ふるさとの風土に学びの部分において、すべての学校が私たちの地域、私たちの学校という、ふるさとを改めて見直すとか、学ぶなどの実践を100%行っていることは素晴らしいことだと思います。その中から新たな絆が生まれたり、深まったりするのではないかと思います、これをさらに推進していただきたいと思えます。もう1つ、総合戦略の取組み評価表の中に、気に入ったキャッチフレーズがありましたのでお話申し上げたいと思います。取組み評価表の7ページ、2-2-2、「ちょっと、もっと、ずっと帯広暮らし」という言葉がありました。帯広に住む人間にとっては、ぜひ進めていただきたいと思いました。帯広に住みたいとか、住み続けたいという感じを抱かせるファクターはいろいろあると思います。現状では自然が豊かとか、住環境が整っているとか、食環境が整っている、豊富であるというファクターによって、UIJ（ターン）も可能かと思えます。もう1つ次のようなファクターがあればどうかと思っているのは、子育てと子どもの教育に関して、ハード面ソフト面で安心安全で、かつ信頼できる教育環境の整備というもの。帯広の教育はすごいとか、この教育を受けさせたいというファクターになり得ると思うわけです。したがって教育振興に関しての施策を改めて見直していただいて、教育を1つの住みやすいファクターに加えて、よりよい良好な教育環境整備を心がけていただければという感想を持ちました。

藤澤 委員

私から2点をお話したいと思います。関係各位のご努力により、教育に関する点検評価は概ね良好だと見受けられました。関係各位に敬意を表したいと思います。1点目は、点検評価のところで、不登校生徒の復帰率が目標値を下回っていました。不登校生徒を復帰させるために、様々な対策を講じられていると思います。フリースクールに通っている児童生徒もいると思いますが、フリースクール

に通学する児童生徒に経済的支援が法制化されると予想されていますので、今後、フリースクールに通う児童生徒も多くなる感じもします。居場所を求めて、フリースクールという選択肢はありますが、少しでも多くの児童生徒が学校に戻って来られるように、今後、フリースクールと学校の連携を密接にさせていただき、調査もさせていただきたいと思います。目標はやはり学校に戻って勉強させていただきたいと思います。2点目は、点検評価とは直接関係ないかもしれませんが、常日頃、教職員の仕事の軽減をお願いしたいと思っています。先生方を見ていると膨大な仕事量です。中学校ですと部活の顧問の先生は土日も試合などがあって大幅に時間をとられますし、小学校は部活がなくても、担任は全教科の授業をしなければいけませんので、その準備など忙しいのを目の当たりにしています。毎日遅くまで仕事をしている先生を見ていると、いつもギリギリの状態に見受けられ、児童生徒と接する時間が少なくなる気がしますし、教職員の心身の健康を守るため、児童生徒と向き合う時間を持つためにいろいろな方法はあると思いますが、事務処理の軽減など、何とか工夫して先生方の仕事の時間を短縮していただければと思います。

佐々木委員

今年初めて教育委員になりまして、このような資料をいただいて、帯広市が教育に関しても多岐にわたり、きめ細かい取組みをされていることを初めて知り、驚きながら読ませていただきました。こども学校応援地域基金についても最近初めて知ったのですが、先日参加いたしました教育懇談会で、ボランティアの方がこの基金から補助を受けて、いつもより充実した夏祭りができて本当によかったと、継続的に受けられるかどうかはわからないけれど、弾みになったというお話を聞き、早速、とても役に立っていると実感しました。今後も子どもたちの楽しいイベントのために補助していただければと思います。それと田中委員がアクティブ・ラーニングだけではなく、子どもたちが自分たちの力で社会を変えられる、動かせるという実感を持たせることが重要だということをおっしゃって、私もいろいろ考えながら聞いていました。急に社会を変える、動かせるということは、大人にとっても今あるものを変えるのは本当に難しいことで、なおさら子どもにとってはハードルが高いことで、実感を持たせることは難しいと思いますが、新しくものを始めることは、今のものを変えるよりは、取組みやすいのではないかと思います。子どものうちから経験をさせることが子どもの意識を変える一歩として

いいのではないかと思います。具体的には、例えば小学校のイベントでは、学校が行うイベント、ボランティアの方々やPTAが行うイベントがあり、子どもたちにとっては本当に楽しいイベントがたくさんあって大事なのですが、すべて大人が準備をするイベントです。1年に1度だと大変ですけれど、何年かに1度でも、子どもたちが一から、5、6年生が主となって、子どもたちだけで話し合わせて何かイベントを立ち上げるとか、誰がどういう分担で進めていくかということすべてを決めさせて、何か1つのイベントを実現させることを積極的に経験させたらいいと思います。もちろん大人のサポートは必要だと思いますけれど、その中で、適正な人員配置など、現実的に自分たちがどこまでできるのかとか、いろいろなことを学ぶことができると思います。それを思いついたのは、自分が小学校の時に、1つのイベントを、中学校・高校の文化祭の真似事なのですが、小学校でも一からやってみようと思いついて言い出して、子どもたちだけで全部企画し、先生がサポートして実現させたということがありました。それが毎年続いて、私が大人になってもやっていると聞き、うれしく思いました。子どもたちにとっては大変達成感があり、自分たちでこんなことができるというところから、キャリア教育につながっていく心構えや準備にもなるので、意識改革の一歩としても、そういった取組みをぜひ学校でされてはいいかと思いました。

嶋崎教育長

教育委員会制度が変わったということもありますけれど、先般、横浜のいじめ不登校について、義家副大臣が横浜の林市長にお話をされている場面がありました。今までですと教育委員会マターだったのですけれど、制度が変わってきて、地域全体の課題としてのいじめがこのように報道されて、内容等については皆さんご承知のとおりなのですが、改めて変わったと実感したところでもございました。それから、今年の8月に帯広で大雨があり、36年ぶりに20か所中、13か所の学校が避難所となったところです。その中でいろいろなご批判もいただいておりますが、学校の施設や先生の存在は、地域と一体となって成り立っていて、大事な財産であり、活用していかなければならないし、地域とともにあると改めて実感できました。

米沢 市長

皆さんからご意見を伺って、私も感じたことを含めてお話したいと思います。先ほど、田中委員、伊藤委員からもいただきました地方創生に絡んで言えば、住むなら十勝、働くなら十勝と言える環境

を作ることだと私は思っています。要するに仕事がなかったらいけないということです。そういう面では、若い人たちの中には、仕事もそうですし、いろいろなものを提供してくれるのは都会しかないと思っている。選択肢ではなく、彼らにとって住むのは都会しかないのです。私は地方創生というのは、都会以外にも生活をする選択肢を作ることだとよく言っています。そのためには、例えば、国が1.何%の出生率というのであれば、子ども2人を産んで育てられる世帯収入を担保できるような仕事がある地域になればいけないし、その子ども2人を育てて、教育できる環境もそこにはないといけないわけです。最近私はどこへ行ってもこう言っているのですが、2人の子どもを生き育てることができる世帯収入を作る仕事を各地域で各資源を使い作れるのかということを実際に考えるべきだし、世帯収入と言っているわけですから、当然共稼ぎをしてもらうことにもなるし、子どもを育てるということは、当然きちっとした教育を受けさせることも入るだろうし、そうした教育環境があるのかどうか考えていくことが地方創生の意味合いだろうと思っています。その面で我々は地域の戦略を考えていかなければいけないと思っています。それから、事務局から紹介がありました、エリア・ファミリーを基盤としたボランティアの横のつながりを広げる、こども応援みらいカフェ、こども学校応援地域基金について、感じているのは、ボーダーと言うと変ですが、制度と生きている現場との接点のところでおっしゃったものと思います。応援基金は特にそうだと思うのですが、こんな時にこんなことができたらいいなところ、先ほど夏まつりのお話をいただきましたけれど、そういうことだったのだと思いました。帯広はそこに手が届くような、これまでの地道な教育活動を行ってきていただいたと思います。案外できないと思います。他の地域ではやっていませんから。この地域のこれまでの積み重ねだろうと、改めて感じています。先ほど伊藤委員がおっしゃられた、大きなことではなくて、小さいことだけれど、そういうところまで帯広ってやるんだということが他の地域との差別化になると思ひ、帯広に住んでみようかと思ってもらえるところではないかと、お話を伺って考えておりました。それから、公共施設の関係ですけれど、これから大きなテーマになっていくと思います。皆さんと一緒にいろいろな議論を進めていかなければならないと思っています。きちっとしたもの、いつまでも使えるものを造っていかなければいけないし、変えるときは変えなければいけ

ないので、ライフスタイルを考えてやっていきたいと思っています。田中委員と佐々木委員からお話のあったアクティブ・ラーニングの先の話ですが、私もまさに同じ世代なものですから、感じるところがほとんど一緒でした。先ほど期待感というお話をされましたが、褒められるとうれしいし、君たちが必要だと言われるとうれしかったわけです。重用される実感とおっしゃいましたけれど、そういうことだろうと思います。何をやっても変わらないという世の中やマスコミ、テレビからネガティブな情報ばかりを耳にすると、違うと実感できない世の中になっているような気がします。それこそ地方都市はそれが実感できる場所、周りのおにいさん、おじさん、おばさんががんばっているのが見える世界を作れるのが我々だし、働くことの意味について言い辛くなってしまった。キャリア、平等、自由の中で、大人が逆に引いてしまい喋らなくなってしまったことが随分あると思います。重用するというのは、何かを選択することですから、選択することから世の中全体がしばらくの間逃げましたよね。そういうことを先ほど伺いながら考えていました。小さな時から、そういうことを実感できることを我々は意識して考えなければいけないと、先ほどの小学校のイベントのお話で感じました。もう1つ、皆さんからはなかった言葉があるのですが、仲間というのは大切だと思うのです。こうやってがんばっているのは自分だけじゃない。先ほど、おじさん、おばさんと言いましたが、それよりも同じくらい子どもたちが、みんな同じことで悩んだり、同じことでがんばったりということが、先ほどのイベントをすることで感じ合うことがとても大切で、それが切断されていたとか、一緒に皆と悩んだり、考えたり、ものを作るよりも、一生懸命勉強することの方に日本全体がそうだったのではないかとお話を伺って感じました。それから、藤澤委員が言われた点では、強い子ばかりではないので、誰だって同じように充実感を持って生きたいと思うし、その手助けがいる人には手を出していかなければいけないだろうと改めて感じました。それから自分の経験を言っただけではないですけど、自分の好きな教科は好きな先生の教科だったし、それで自分の方向が決まった部分があります。そう考えると、先生がいきいきとしていれば、子どもたちもあんなりたいと思うわけです。藤澤委員がおっしゃったギリギリの状態です。先生自体が疲弊していたら、せっかく目の前にいる一番身近にいる大人が疲れていたのではいけないなと思いました。今までもいろいろと取り組んでこられたと思いま

すけれど、がんばっていかなければいけないと思っています。皆さんのお話しを伺いながら感じたことです。あとはスポーツの交流について、今年ハリオのオリンピック、パラリンピックがございました。先般10月の市長コラムで書いたのですが、昔は、勝て勝てでしたが、今回はそれだけではなくて、自分がそうだったからかもしれないませんが、ゴールドメダル以外にも目がいきましました。競技の勝ち負けというよりも、そこにいる一人一人の人生とか、それまでに何をしたかという過程に皆の目がいくように日本もやっとなったと思いました。スポーツはものすごい力を持つという感じを改めて持ちました。そういう面では、教育の中におけるスポーツの重要性を今年は改めて感じさせられたところではあります。2月にアジア大会があるから言っているわけではないのですが、今申し上げたような形でスポーツをより実感できるようなすごくいいチャンスだと思います。ボランティアの方々と成功に導きたいと思っています。本件についてはよろしいでしょうか。

各 委 員
米 沢 市 長

はい。

次に、3. 協議事項に入りたいと思います。今回の意見交換は、既に触れていただいた部分もございますけれど、学校教育と社会教育の連携についてをテーマとしたいと思っています。昨年度の総合教育会議におきまして、帯広市教育基本計画を本市の教育大綱として位置づけました。そもそもこの計画は、学校教育と社会教育を網羅して、学社連携を強く意識しているものであります。計画期間が残り3年余りとなり、従来の取組みを振り返り、今後について検討することが必要と考えております。また、現在、国の中央教育審議会では、学習指導要領の改訂に向けた議論が進んでおりますが、キーワードの一つとなっているのが、先ほども出ましたアクティブ・ラーニングであります。ご案内のように、この考え方は多様な人との対話や課題解決の取組みなどを通して、子どもたちが学んだことを自分の生き方や世の中と結びつけて、深く理解することを目指すものです。帯広市でも昨年度、策定した総合戦略において、分野横断的なプロジェクトの一つに位置付けられております。こうした状況を踏まえまして、本日はこれまでの取組みを振り返りながら、今後に向けたヒントをいただきたいと考えております。先ほども一部ご意見をいただいておりますけれども、改めて帯広市の取組み事例について、事務局から情報提供をした上でお話ししたいと思います。お願いします。

神田 部長

それでは、A3の縦長の資料にてご説明いたします。この表につきましては、昨年度、市長部局並びに教育委員会におきまして実施し、主に小中学校を対象にいたしました学びの取組みにつきまして、担当課ごとにまとめたものでございます。網掛けの部分の主な事業についてご説明させていただきます。まず、8番の帯広市国際交流員派遣事業につきましては、市の国際交流員を小中学校へ派遣し、外国の生活文化を児童生徒が学ぶ取組みでございます。異文化や異なる民族への理解を深めることで、豊かな人間性と国際性を持った子どもたちを育成していくものでございます。続きまして、11番、41番、63番、64番、82番につきましては、出前講座でございます。各分野の専門知識を持った学芸員などが小学校や保育園などに直接出向きまして、授業を行うものでございます。環境の保全やアイヌ文化などについて体験や行動を通じまして、さらに関心を深めていくきっかけにしていくものでございます。続きまして、23番、とかちプラザで毎年開催されております、おびひろキッズタウンでございます。キャリア教育の一環として、疑似通貨「じゃが」を使いながら、子どもたちが職業体験や社会のしくみ、お金の価値などを学ぶ取組みでございます。続きまして、32番、宿泊研修でございます。児童会館におきまして、科学の理解を深めるとともに、集団生活を行うことで社会性の育成や適切な人間関係の築き方を学ぶ機会としているものでございます。続きまして、70番から72番、小説、童話などの教室でございます。図書館におきまして、ジュニア文芸誌の編纂に携わっております、編集委員などが講師となりまして、文章の書き方のコツなどを教える教室でございます。さまざまな文章表現を通じまして、子どもの伝える力や創造力を育んでいくものでございます。このほか、7番、29番、65番、88番などは主に教員向けの講座でございます。例えば、消費者のためのさまざまな制度や実践事例などを紹介いたしまして、学校の授業において効果的に活用してもらうための情報提供をさせていただいております。以上、取組みの一部をご紹介させていただきました。ご覧のとおり、学校教育と社会教育が連携した取組みにつきましては、現在、市役所の各担当課が持っております、それぞれの施策に基づきまして実施されているところでございます。事業全般を通しまして、私どもが感じております課題もございまして、ご説明させていただきます。3点ございます。1点目、これらの事業につきましては、子どもたちが授業で学んだ知識を社会生活の中で実践でき

るような内容で企画しておりますが、子どもたちが学んだ教科内容と必ずしもリンクしていない面もあり、つなぎ部分についての工夫が求められていると感じてございます。2点目、それぞれの社会施設がっております、さまざまな資料や設備について、学校側が十分に情報共有しきれていないために、せっかく授業で学んだ知識のその先の広がりには社会教育施設の機能が生かされていないという課題もございます。3点目、これらを踏まえますと、今後さらに学校教育と社会教育とを適切につなぐ仕組みができると、これらの事業はより効果的な教育プログラムになっていくものと考えているところでございます。説明は以上でございます。

米沢 市長

今の話にございましたけれど、学校の教育活動と社会教育施設の取り組みについてであります。この相互理解をいかに推進、促進していくのかとして、効果的な教育プログラムを推進するためには、言われて久しいですけれども、学校と施設をどう繋いでいくのか、多分、世界中の課題になっているのではないかと思います。教育に係わらず、繋ぐということがキーワードで、物とインターネットを繋ぐというのがありますし、今あるものをどう繋いでいくのかということが求められていると思いながら聞いておりました。このような課題を意識しながら、皆さまからご意見をいただきたいと思っております。

藤澤 委員

私からお話させていただきたいと思っております。私が小学校、中学校の学校評議員をさせていただいたときに感じたことなのですが、学校と保護者だけでは子どもたちの教育は成り立たないことを実感しました。地域の皆様の支援が不可欠で、登下校の見守り活動、夏まつり、図書読み聞かせ、子どもの居場所づくりなど、地域の方のお力をお借りして活動しているのが現状です。地域の方のお力をお借りするにあたって、学社連携の観点から考えますと、地域の方々には多種多様な分野のスキルをお持ちの方がたくさんいらっしゃると思っております。例えば、百年記念館や図書館の講座で学んだことを生かして、学校で子どもたちに教えてくれることはとてもいいことだと思います。ただ、学校が求める人材とマッチしなければ、教えてもらう方も教えてくださる方もお互いにプラスにならないことがあるので、学校が求める人物像やスキルについて情報を発信して、すり合わせていくことが大切だと思います。学校教育におきまして、学校の中では成し得ない刺激や体験を子どもたちの心や身体に与えてほしいと思っております。児童会館は科学展示室、プラネタリウム、実験室の設備を有しまして、子どもたちの好奇心や探究心、今言われてい

ます非認知的能力の養成にも大きく貢献できる施設だと思います。学校とのつながりをもっと密接にすることで学社連携も進化していくのではないかと思います。体験的学びは子どもたちにとって、興味を覚えて楽しさを実感でき、生きる教育だと思います。市にはせっかく図書館、児童会館、百年記念館、動物園というよい施設がありますので、より強い連携を望みます。市の施設ではありませんが、美術館など他の施設もありますので、学校で成し得ない楽しさがある施設と連携していくのがいいと感じています。

米沢 市長
伊藤 委員

ありがとうございます。

重なる部分もありますけれど、教育委員としてできるだけ現場を見て歩こうと、多くの学校や施設を見させていただいております。特に最近の学校での授業風景から感じるがあります。従来は知識、技能の伝達が多かったのですけれど、最近では自らの考えを持たせ、協働することによって、課題解決力を持たせるという教育方法が先生方の献身によってかなり洗練された専門性ある形で進められております。市長のおっしゃったアクティブ・ラーニングの方法がすべての教室で実施されていると感じております。いわゆるアクティブ・ラーニング法というのは、初めは大学の教育の中で行われたらしいのですが、近年、小・中学校へ下りてきているということです。教師と子どもの双方向による脳働的学習、造語だと思いますけれど、あるネットではそういう言葉を使っておられて、なかなかよくわかる言葉だと思います。そういったことにより、子どもたちは何を教わっただけではなく、何をどう学ぶが、何ができるようになったのか、できたものをどう生かすことができるのかといった力が徐々に育ちつつある教育法ではないかと感じました。それと同時に子ども同士の接点が非常に多くなりますので、子ども一人一人の自己肯定感や自尊感情が芽生え始め、それが結局は他者理解につながり、協調性や公共性につながる授業風景、子どもの様子を伺うことができました。そういった学校で培った力をより強固で広がりのある力へ育てるには社会教育との接点、すなわち連携、融合という形で進められることは避けて通れないだろうと思います。幸い帯広は、市長部局はもちろんのこと、生涯学習部においても従来から社会教育施設や民間団体が豊富にあり、特に学校教育とつながりを持つ施設、あるいは民間団体が非常に多く多岐にわたっており、関係者の意識も非常に高いと思っています。こういった盛り上がりにより効果的に学校教育に機能させる上で、活動を推進する上で、学

学校教育であれば、指導主事と生涯学習部であれば、社会教育主事との間で、既存の各種社会教育施設のあり方、団体等の活動状況を的確に分析、把握し、学校が持つ学習指導要領との間において、どの施設と、あるいはどの団体との間で適切な連携が取れるか、あるいは融合することができるかといった縦系横系の工程を明確にするようなコーディネートを経営で確立されてはどうかと感じています。幸いにも市内中学校を基軸にした、エリア・ファミリー構想ができ上がっておりますので、これを上手く活用することが必要ではないかと思えます。先ほど申しました組織の中で意見を統一し、より専門性のある、より洗練されたコーディネートを、既存のエリア・ファミリーの連絡協議会があると思えますから、そこに働きかけ、今一度見直すことが必要な時期にきていると思えます。身近な組織の見える化とその行動の見える化によって、エリア・ファミリー意識が高まり、地域を大事にし、つながりをさらに持とうとする人々の広がりが期待されるのではないかと思えます。そのことにより、より質の高い学社連携と学社融合、連携というのは受身的な活動、融合というのは双方が持つ組織同士が1つの目的を持ってやるという学社融合という言葉ですけれど、そういう雰囲気が生まれてくるのではないかと思えます。こういった質の高い社会教育機能、ステージにて、児童生徒がもまれることにより、より確かな生きる知恵を持った自律的で課題解決力を持った児童生徒の育成につながっていくのではないかと思えます。うれしいことに、その下支えをいただいているのが、先ほど出ていました、こども学校応援地域基金、関係団体への奨励、新たな団体誕生へ強力な助っ人になっていると思えます。さらに学校教育部では教育実践において顕著な実践をした学校に表彰規定により、毎年何校か表彰されています。先生方にとっては非常に力になると思えます。社会教育にもそういった制度があるのかわかりませんが、もしなければ、社会教育として、学校教育とつながりの深い既存の社会教育団体、これからめざそうとする目的志向型団体への奨励にもつながる表彰規定を将来的に生涯学習部で設けてはどうかと思えます。それにより、帯広の教育はすごい、すばらしい、子どもを安心して学校や地域に預けられると思っていただけるのではないかと感じます。市で推進していますUIJターンも促進できて、移住者も増えるのではないかと思ひ、学校教育と社会教育との連携をさらに深めていただければと思ひます。

それでは、私からも学社連携に関して思っていることを述べさせていただきます。まず、自分の関係で言うと、伊藤委員からもアクティブ・ラーニングは大学では既にやっているというお話がありました。アクティブ・ラーニングやPBLは、俗っぽい話ですが、今、大学では補助金対象になっていて、やっていなければ補助金が付かないということです。今ほとんどの大学、短期大学では軒並みPBL、課題解決型学習ですが、もしくはアクティブ・ラーニングは当たり前のようにやる時代になっております。私どもの短大でもアクティブ・ラーニングという言葉は使いませんでしたけれど、今まで実習では外に出ていろいろなことをやってまいりました。社会教育主事の資格を出すために、帯広では居場所づくりに関するところや図書館の司書、百年記念館の学芸員や児童会館などでも実習をさせていただきました。社会教育に関する係わりが非常に深かったと理解しています。短大としては、十勝全体をフィールドとして考えて、いろいろな形で実習に出していこうということもしております。一番要になると思っていたのが大学や短大は、昔はよく言われた、象牙の塔という言い方があって、とにかく外には出て行かないということ。ところがそれでは外に出ていけない教員が学生を教えても、外に出て行きたがらない学生しか生まれないのは当たり前前の理屈でございまして、とにかくいろいろな形で、特に学校と係わらない地域の人たちと結びつく必要があるだろうということで、ここ数年さまざまな異業種と業務連携を結んでまいりました。音更にあるため、音更JAや音更商工会などと連携をし、学生に実習をさせるなど、いろいろな取組みをしております。実は体験的にわかっていることですが、座学で90分の授業を10回やるよりは1回外に出す、実習に出した方がはるかに学生の成長が早いのです。フィールド・ワークなり、アクティブ・ラーニングなり、実習系の授業にできる限り出した方がいいと私の培ってきた経験から言えることです。ただ、実はそこがやりにくいところでもあります。なぜかという、出るためには外に出すためのアクセスの問題や交通事故が起きたらどうするのか、何かを壊したらどうするのか、いろいろな問題があり、そこが先生方を億劫にさせる大きな理由になっています。そこを突き抜けていくと、若い人の成長が明らかに見てとれると考えているということが1点思っていたことです。もう1つは、今回の学社連携のお話の中で、先ほど市長がおっしゃられた、つなぐという観点で言えば、教育基本計画が平成22年に作ら

れたときに、学社連携はメインテーマだったと思います。学校教育と生涯学習をどう横串を刺して、つなげていくか、お互いの境界をうまく重ね合わせていくことがポイントだったと思います。あの当時はかなり画期的だったと理解していて、そういうことをしていかなければいけない中で、私が思っていたのは、学校の先生や生涯学習の関係の行政の専門の皆さんの人材について、通常では見ることができないところをどう引き上げていくかということ、実はあの先生にはこんなところが専門的だとか、学校教育の現場だけでは絶対出てこないだろうし、あるいは、百年記念館の学芸員も通常やっている仕事とはまったく違うところで変わったことをやっているとか、学校教育と生涯学習のコミュニケーションの中で、拾い上げていくことができれば、大分変わっていくだろうと考えておりました。それをやるのは、先ほど市長が言われた、つなぐということ、どうやってつなげていくかということになるとと思います。それがすぐにできたのは、異世代間交流で高齢者の方々が学校に入って行って、彼らの得意分野を子どもたちに見せることによって、明らかに新しい風や流れができあがってきておりますので、学校の先生や行政の学芸員、図書館の方々を含めてできればいいと思っています。以前、動物園の学芸員の方たちのブログをラジオで聞いていたら、とてもおもしろいのです。もっともっと子どもたちや社会に還元できるのではないかと思っておりました。もう1点、アクティブ・ラーニングの話に戻りますと、よく言われるのは、主体的に生きる力をどう育成するかという話、今までの受身の知識だけでは、先ほどの話ではないですが、これからの時代になかなか上手く適応できないということも含めて、主体的に生きていく力を育成していかなければならないと思うのですが、小中高、大学行く人もいれば行かない人もいますけれど、勉強できる年限はマックス16年から20年くらいだろうと思います。ところが、世の中、働いてからも勉強しなければいけないというのは、歳をとって段々わかったことでもあります。働きながら勉強しなければいけない。学校が終わったら勉強しなくてもいいと小さいときにはずっと思っていました。一生学んでいかなければならない。小中の義務教育でアクティブ・ラーニングがあると、一生学ぶ下支えの力を身に付ける、生きる力を身に付けさせることではないかと思っています。先ほど市長がいみじくもおっしゃられたとおりで、私もメモに書きましたが、記憶に残る授業や記憶に残る実習、記憶に残る先生の後ろ姿のイメージで生きていける

ところがありまして、それをどうやって作り出していけるだろうかと思っています。これからの問題だと思いますが、アクティブ・ラーニングは、ノートが取りにくい、まとめにくい、勉強しにくい、力がついたかどうか本人はよくわからない、要するに評価の問題で、先生方も評価しにくいということが出てくるので、ただ、明確なのは、知的な能力だけではないことを、子どもたちが実感できるかどうかにかかっていると思います。知的な能力ももちろん大事ですけど、それ以外にも能力はあるということです。コミュニケーション能力、調整能力など、思わぬところで思わぬ友だちが思わぬことをやるということを経験できるのは、アクティブ・ラーニングなりの一番のポイントになると思います。最後に先ほど伊藤委員がおっしゃられたとおり、私も帯広地方創生ということ、16万人前後のこのくらいの都市だからこそできることはたくさんあって、帯広に移住したら素晴らしい教育が受けられることを堂々と言える地域で、教育都市であってほしいと思っています。そういう場を社会全体で思いを共有できるような体制、仕組みづくりをしていただきたいと思っています。そのためにこれから何ができるか、教育委員会も、市長部局も、他にさまざまな分野の方々が次世代の子どもたちをどうやってこの地域に根付かせるか、しっかりがんばってもらえるかということの本気で考えるような、ぜひ、教育委員会でも、市長部局でも、こういった会議でも構いませんので、どんどん発信してもらえればと思います。学社連携というのはその発端になるのではという理解しております。長くなりましたが以上です。

佐々木委員

学社連携の事例が99もの、こんなに数があったのかと思いました。この中で子どもたちはいろいろな職種の方に出会って、いろいろなことを教えてもらっていると思います。教えてもらうこと自体は本当に大事なことで、これからもどんどんやっていただけたらと思います。ちょっと見ていて思ったのは、学んだ教科をその先の社会生活に活かしていくことをやっていらっしゃると思いますが、学校で勉強したら、自分の将来に役立つという漠然とした感覚では、子どもたちはあまり身に入らないと思います。やっていることが余程楽しければ一生懸命やりますけれど。子どもたちは勉強していて、これ何の役に立つんだろうとよく言うのですが、これやっておかないと後で本当に困るからと言ってみても、子どもたちはわからないので、ただ、やった方がいいと言われるから、がんばって勉強していることが多いと思います。その段階を超えて、せっかくいろいろ

な教室でいろいろな職種の人と出会うわけですから、ただ、教えてもらうわけだけではなくて、その授業の中で時間をとって、その職業の方、例えば、科学者、動物飼育員、文芸関係など、その職種の方がどういう子ども時代を送ってきて、いつその仕事を志すようになったのか、志してからどういう勉強をしたのか。小学校時代を振り返りこういう勉強をしてきたことが、進路が決まってからどう役立ったのかということの説明することは既にしているかもしれませんが、もし、そういう時間を設けていないのであれば、簡単に説明するのは難しいかもしれませんが、いろいろな職種の方々がたどって来た歴史のようなものを子どもたちに少しお話していただけるといいと思って見ておりました。その職種に子どもたちがなりたいと思うかどうかは別として、自分がいつかこうなりたいと思ったときに、その先のたどっていかなければいけない未来が想像しやすくなると思います。進路が決まる前でも、いろいろな職種の方の現実的な進み方を聞いていけば、将来どんなことをやろうか考えたときに、いろいろな選択肢が見えてくると思うので、非常に大事ではないかと思います。子どもたちは将来何になりたいか聞かれても思いつかない。親がやっている仕事か知っている人の仕事くらいしか思いつかないので、夢を持つようにも、自分がどういう夢を持てるのか見えていないのが現実です。せっかくいろいろな人材がいらっしゃるので、子どもたちに将来の夢を持たせる意味でも、そういう取組みをされてはどうかと思います。

嶋崎教育長

学社連携ですから、もちろん教育委員会内部のところを改めてしっかりやっていかなければならないと思います。各施設の専門の職員という素晴らしい人材に学校の先生が気づけるよう、我々事務局がその良さを知って、必要なところにつなげられる情報を渡せるようにしなければいけないと今日改めて感じたところです。もう1つは、学社は教育だけではなくて、食育や大人同士が勉強している場面、パン屋さんが十勝の小麦を使って美味しいパンが作れるか一生懸命にがんばっている姿やお蕎麦を好きな方がお蕎麦を打つなど、地元の中でそういう姿を見ること、そういうつながりが豊かになっていく、連携、融合と伊藤委員もおっしゃっていましたが、そういうことが取組みとして厚みを持たせていく、そこを大事にしていかないと改めて感じたところでございます。以上です。

米沢 市長

いろいろなサジェスションをいただいて本当ありがたいと思えました。藤澤委員からいただいた非認知的能力について、我々は意識

していかなければならない。どうしても今までは認知的能力にウエイトがかかっていたけれど、意識して好奇心や協調性、要はおもしろいなという活動の中から非認知的能力というのがアップしていくと思うので、そういうのは必要だろうと思って伺っておりました。伊藤委員と田中委員も、なるほどと思ったのは、問題意識を皆で共有しなくてはいけない。先ほどU I Jターンのお話がありましたけれど、今、地方創生で人口を増やすために、都会からいろいろな人が来てほしいと言いましたけれど、帯広の教育がいい、あそこで私の人生をという選択をしてもらおう。問題意識を共有している人たちが集まると、先ほどの嶋崎教育長の最後の話もそうですけれど、大人がそういう大人になることがまず重要ではないかと思います。大人が適当なことをしていて、子どもにだけしなさいというのは話にならないということを改めて感じたこと、それから、伊藤委員のお話で記憶に残ったのは表彰制度です。一見堅く見えますけれど、ある世代は、私もその世代に入りますが、意固地で捻くれていて、上から褒められることをあまりよしとしなかった時代が、それも官から褒められるなんてふざけるなという時がありました。でも、実は褒められたらうれしいのです。この年になったから言うのですけれど、素直に褒める社会、褒められたらうれしいという社会、当たり前ですけれども、そういうのがあったらいいと思います。帯広はいいものはいいと言うし、皆で褒めるし、照れずに喜ばばいいし、それがどの世代でも起きたらいいと先ほどお話を伺いながら感じていました。それから、アクティブ・ラーニングについて、皆さんからたくさんお話をいただきました。実は私は5月にデンマークへ行って来ました。デンマークでいろいろな人と4、5日間、お会いしてきたのですが、デンマーク人と結婚している慶応義塾大学の女性の教授がおられて、現在、小学生と幼稚園の子どもを育てているということで、まったく同じことを言われました。デンマークの教育を教えてと言ったら、日本と違うのよ、勉強の仕方を教えてくれる、グループワークの方法を教えてくれる、課題の解決ではなく、探し方を教えてくれる。それから、ディベートではなく、ダイアログ、要は対話です。自分の子どもたちを見て言っているのですけれど、幼稚園からプレゼンテーションの方法を教える。全部目的ではないのです。こういうことを身に付けさせた上で何をするとかということだそうです。私が驚いたのは、これは大人や大学生の話ではなく、彼女が育てている自分の子どもが学校や幼稚園でこうされていると

いう話を聞いたとき、うっと思いました。小さいときから個人として尊重される、個人を意識させられる。自分でものを考え、判断する人間を育てようという意識だろうと思います。ここで終わらず、この先生の後がおもしろかったのは、皆日本と違うみたいで悔しいと、自分のデンマーク人の義理の母親が子どもの寝る時間になると、そろそろ寝る時間じゃないかしらと言うそうです。子どもが自分で考えて、そうだねと言うそうです。しかし、自分の育った環境は、もう何時だから子どもは寝なさいと言われて押し付けられた。でも、それが悪かったかという、決して悪くなかったのではないか、それは、そういうものだと言っていました。そういうとき日本人は全部卑下してしまう。嫌だけどやらなければならないことがあるでしょう。言われたからやらなくてはいけないというのは、日本人が一番得意だと思います。でも、その先に発見が出てくる可能性もあって、いろいろなバランスだと思うのですが、サジェスションを随分していただいたのですが、日本の良さも忘れないで、嫌でもやらなければならないことは、デンマーク人はやらないそうです。誰がやっているのかと聞いたら、移民だと言っていました。デンマークのトップクラスの人たちは、嫌なことはやらないそうです。それが果たしていいかどうか、一面の話ですけれど。我々は考えなければいけないことがたくさんあると改めて今日感じたところでありませう。それから、時間が必要だということは明らかで、藤澤委員、田中委員もおっしゃっていましたが、いい人、勉強になる大人はたくさんいると思います。教員の仕事、市長なら市長の仕事があり、すべてその仕事にとられていて、もっといいところがいっぱいあるわけです。ボランティアをする時間はないわけですが、本当はそこがすごくよかったりするわけです。最近の働き方改革とか、自分の時間を作ることは、本当はそういうことなのかと思います。社会の豊かさもそこから出てきて、教育は単に学校に預けるものではなくて、社会全体でやるというときに、大人たちもそこに入っていける制度が担保され始めると、日本も変わるのではないかと、先ほど、おもしろい方がいたという話のときに感じたところです。今日は楽しくお話を伺いましたが、これを踏まえまして、さらに連携を深めてまいりたいと考えております。

その他、事務局から何かありますか。

事務局

本会議でございますが、緊急の場合を除きまして、今年度の開催は今回のみと想定しております。

米沢 市長

それでは、以上をもちまして、平成28年度第1回帯広市総合教育会議を終了いたします。

本日はありがとうございました。